長洲町立長洲小学校　校長便り　№１３４

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和５年１１月１７日(金)

【雑感】教え子達に学ぶ

我々教師の職業は非常に特殊です。というのは、教育を受ける側として現場にいたかと思うと、教員採用試験に合格すれば今度は先生として現場にいる訳ですから、世間知らずのルーキーという訳です。私にも経験があります。大学を卒業してすぐ、臨時採用の講師として龍田小学校に勤務した時のこと、宴会に平気で遅刻してしまいました。私は大事に考えなかったので、後で学年主任にこっぴどく叱られました。教職の現場に限らず、ルーキーにはこのようなことが起きます。しかし、ルーキーだからと言って許されないことがあるのも事実ですね。

私の教え子に医者が３名います。このうち済生会熊本病院に勤務していた教え子とこんな話をしたことがあります。この子は呼吸器内科に勤務していて、２年ほど足踏みしておりましたので、医療の現場で患者さんと向き合うことに対してある種の「厳しさ」を体で学んでいました。

「澤田先生、医者の仕事って教師と一緒で人と接するという意味では同じ責任がありますよね。私思いましたよ、最近肺がんの患者さんと話すことがあって、外科治療（手術）が今の段階では難しい患者さんだったんだけど、その患者さんが内科治療に望みを託す訳ですよ。そして、私の様な若造に『先生にお任せします。』って仰るんです。私、ある意味恐怖を感じました。命を預かる者としての責任の重さってこれなんだって。」

私は偉そうにこう言ってやりました。

「そうだ、やっと分かったか。患者さんは命をかけてお前に命を預けるんだ。だからこそ、患者さんの人生に責任を持つという覚悟で向き合わなんいかん。俺は、教職人生、失敗や後悔の連続だけど、その時その時で最善と思われる選択をして、できることを精いっぱいやってきた。正に『人事を尽くして天命を待つ』という感じだ。患者さんの人生に責任を持つというのとは違うかもしれないけど、教え子達のアフターサービスは切らしたことが無いぞ。お前もきめてな。お陰で楽しい教師生活だけど。」

医師は目の前の患者さんの辛さに向き合い、治療によって辛さを取り除き、回復という結果を出すのです。しかし、教師の仕事はパフォーマンスによる結果が、１０年先２０年先にしか検証できませんね。テストの点数には短期的に反映されるかもしれませんが、教師の求められるものはそれだけではありませんから。

医師も教師も、目の前の人間に責任を持たねばならないことは言うまでもありません。教師は他の職業と比較すると、少々先の将来を見越した仕事をしないといけないのですね。医師は「そこまで私にはできません。どうすればいいのですか?」とは言いません。教師もそうだと私は思います。新米教師だろうがベテラン教師だろうが、目の前の課題に正対し、出来ることを徹底的に探り、徹底的に遂行することが、プロとしての責務だと私は考えています。

すっかり面倒くさい話になってしまいました。人生の質（ＱＯＬ）を高めるために、私は「初心」と「プロ意識」を忘れないようにしていきたいです。

シリーズ「自分を語る」#１３４

揺れが収まり、そして、家族全員で外に出てみました。同じ心境だったのでしょう、ご近所さんも外に出て来られました。互いの息災を確認した上で周辺の状況を見て回りましたが、近所の家屋そのものには大きな被害は無いようでした。しかし、庭の植木鉢などがことごとく倒れていました。部屋の中もそうでしたから当然のことでしょう。外でご近所さんと立ち話をしている最中にも余震が襲ってきます。最初の地震は震度７でした。しかしそれ以上に恐怖を感じた揺れの連続でした。家の中に戻りましたが、当然落ち着いていられる訳がありません。先ず、家屋の損傷とすぐに処置が必要な場所を確認しました。家の中は、家具や食器棚等の家財がメチャクチャでした。２階は扉の立て付け、エアコンの損傷、私の部屋はと言えば本が散乱し、本棚が普段私の寝ている場所まで移動していました。多分、一瞬にして飛ばされたのではないでしょうか。本が入ったままで倒れていました。有り得ないという状況です。もし、地震のあった時間に私が寝ていたらと考えると、ゾッとします。ガラスが割れるなどの被害はありませんでしたが、母屋が相当軋んだのでしょう、壁紙はことごとく亀裂が入り、それが私たち家族の恐怖を煽りました。被害状況のチェックを行いながらも余震が続き、母屋で安心して眠るなんてことはできませんでした。で、私たち家族の判断は車中泊でした。ワゴン車の中に家族７人、ギュウギュウ詰めで寝ました。車の中に入ったのは午前１時頃でした。次の日私は仕事でしたし、妻も母も仕事、子供達は学校という状況でしたので、そうするしかないという選択でした。

午前４時、私はどうしても眠れないために外に出て、小屋に置いてあったアウトドア用の椅子に座って眠りました。眠ったというより目をつぶって今後起きることを想像していたという感じです。夜明けまで不安でした。たまに母屋に入り、テレビをつけると地震の報道ばかりで、まだ情報が集約されていない状態だったようです。

辺りが白み始め、地震の被害が見え始めました。あまりない経験でしたが、朝から外で家族が「おはよう」と言っている場面は、それはそれで良いものでした。私はと言えば、出勤の準備をして出発です。当然、家族はそのまま母屋や小屋での生活です。

この時点での、我が家のライフラインについて記しておきましょう。電気、ガスはＯＫでした。しかし、水がダメでした。断水でした。しかも、復旧した後も時間が経つにつれて水が濁り、飲める状態ではありませんでした。

さて、出勤する足取りも超重たい私でした。荒尾までこんなにも遠いものかと感じました。学校に着くやお守、校長室に駆け込み校長先生にネガティブ発言です。「校長先生、心が折れそうです…」本音を吐き出しました。この言葉は、家族の前では言えませんでしたね。ところが、荒尾市ではあまり被害も無く、学校も通常通りでした。何が不思議な気持ちがして、「私はこんなにきつい思いで出勤しているのに、なぜ先生方はニコニコで仕事ができるんだ?」という気持ちでした。

その日もヘトヘトになって退勤です。地震の影響でしょうか車の量が多く、普段なら１時間で帰宅するはずなのに、２時間半かかってしまいました。

続いていた余震が小さくなってきて、私たちは母屋に戻り食事、風呂にも入って一息ついていました。４月15日（金）午後１０時です。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）